

「俳句を作る短歌を詠む 7-8」を教えて

浜畑 祐子

初めに

近年音声学等の方面から俳句を日本語教育の教材にという声を耳にするが、俳句や短歌を柱に据えた授業はあまり聞かない。そこでテーマ科目の制度が設置されたとき、さらに一歩進めて句作という創造性に訴えるクラスをやってみようかと考えた。句を作ることで日本語に能動的にかかわり、日本語のリズムを習得できるのではとの思いであった。当初は6-8のレベルで行ったが学生数が多かったのとレベルにかなりの差があったことから、2010年度よりクラスを「俳句を作る短歌を詠む 7-8」と「詩歌を作る・詠む 5-6」の2つに分けた。

目的

- ・創作の楽しさを知る
- ・俳句・短歌を作ることで日本語のリズムを知る
- ・俳句・短歌を鑑賞・批評するための語彙・表現を学習する。
- ・季語を通して日本の四季を知る。季節の言葉を学ぶ。

内容

① 句会

- ・隔週で句会を行う
- ・学生は句会の2日前までに俳句か短歌を2~3句（首）メールで提出
- ・教師は提出俳句の文法のミスや意味不明の箇所を指摘しメールでやり取りをする。
ここで指摘するのは文法等のミスのみであり、技術的なことは句会で述べる。
- ・句会用のプリントを作成、作者の名を伏せ教師の句も含めて俳句を印刷する。
- ・句会では、まず学生が一句ずつ音読しその後教師が音読、音読することでリズムのいい句、そうでない句、切れのある句、ない句が分かるようになる。言葉や季語の説明をした後選句する。選句とは好きな俳句を選ぶことで各自2~3句を選出。
- ・選句した句を発表後参加者全員で合評する。何故この句を選んだのか、どこに共鳴したのか等、自由に感想や感動を述べる。教師も鑑賞者となり感想を述べる。
- ・作者が名乗りを上げ、コメントする。
- ・全体の振り返りをする。

浜畑祐子／「俳句を作る短歌を詠む 7-8」を教えて

②鑑賞

- ・隔週で鑑賞する
- ・小学生から古今の名句まで幅広く鑑賞する。
- ・まず学生が一句ずつ音読し教師が音読する。音読することで日本語のリズムに慣れ、句切れ・破調などを理解していく。
- ・学生は2~3人のグループに分かれて意見や感想などを述べ合い、俳句の解釈を試みる。各グループの解釈を発表、意見交換をする。教師も一鑑賞者として参加する。
- ・全体の振り返りをする。

③その他

- ・吟行 学期に一度外へ俳句を作りに行く。
- ・短歌 学期半ばで短歌の作り方を導入し、以後句会には俳句・短歌どちらを出してもいいことにしている。短歌も鑑賞をする。

反応

初句会の後感想を求めると、「自分の句を選んでくれたことに感動した」、「自分の作った句をこのように鑑賞してもらってうれしい」というコメントが、学期の終わりには「日常のいろいろな所に目が行くようになった」「四季に敏感になった」という声も出る。日本人は自然を詠むことが多いが、留学生は内面を読み込もうとするようだ。そのためか俳句・短歌を鑑賞する場合も、これは何の象徴かと一字一句を深読みしがちのように見えるが、それに自らの人生を重ねて感動や感想を伝えようとする。これは普通の日本語クラスではあまり体験できない光景のような気がする。

文法の側面から見ると、俳句は17音と非常に短くしかも季語が入るため、実際に言いたいことに使えるのは12音程度となる。この12音を有効に使おうとすると助詞に多くを語らせるほかはない。助詞がうまく使えるようになると動詞が省略できる。助詞の大切さを理解するはずである。

反省点

俳句を鑑賞しているといろいろな解釈が出てくる。学生は皆異なる国から来ているわけで解釈が違うのは当然、大いに喜ばしい点でもある。が、文法を無視して言葉だけを繋いで世界を作るとなると別の話になる。その点を指摘すると解釈の押し付けだと受け取られかねない。どこで線引きをすればいいのか日々悩むところである。

最後に

俳句は座の文芸といい口承文芸である。目で読むものでは決してない。句座を囲み互いの俳句を鑑賞・批評することで、その楽しさが少しでも伝わればと願うしだいである。